

2023年7月7日

各位

公益財団法人 大同生命国際文化基金  
理事長 北原 睦朗

## 2023年度（第38回）大同生命地域研究賞 受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：北原 睦朗）では、2023年度の大同生命地域研究賞の受賞者を決定し、下記のとおり贈呈式を開催しますので、お知らせします。

### 1. 贈呈式

日時	2023年7月25日（火） 14:00～15:30
場所	一般社団法人 クラブ関西 大阪市北区堂島浜1丁目3-11 電話：06（6341）5031

### 2. 受賞者（本賞の詳細および受賞者の略歴・業績紹介は別紙参照）

受賞区分	受賞者（各五十音順）	対象研究
①大同生命地域研究賞 （副賞 300 万円・記念品）	京都大学 名誉教授 たに ゆたか 谷 泰 氏	地中海・中近東地域における牧畜文化の歴史文化的意味に関する研究
②大同生命地域研究奨励賞 （副賞 100 万円・記念品）	東京都立大学 人文社会学部 准教授 かわい ひろなお 河合 洋尚 氏	中国・客家の国際的ネットワークと「原郷」空間創出を事例とした、グローバル化時代の新しい地域研究の創成
	日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター 主任調査研究員 さかぐち あき 坂口 安紀 氏	ベネズエラを中心とするラテンアメリカの政治経済研究
	京都大学大学院アジア・アフリカ 地域研究研究科 教授 ふるさわ たくろう 古澤 拓郎 氏	ソロモン諸島を基盤とする人類進化と適応に関する学際的地域研究の新展開
③大同生命地域研究特別賞 （副賞 100 万円・記念品）	上智大学 アジア人材養成研究センター 研究員 ラオ キム リアン 氏	アンコール・ワット「ISO14001」（環境マネジメントシステム）認証取得のための環境保全活動

以上

# 大同生命地域研究賞について

## 1. 創設趣旨

- ・大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社（当時）の創業80周年（1982年）を記念して、外務大臣の認可を得て1985年3月に設立された公益財団法人です。設立以後、「国際的な相互理解の促進」を目的とした様々な事業を行ってまいりました。
- ・大同生命地域研究賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、「様々な地域の人々と文化に対する理解」を目的とし、関係学界の協力を得て創設されたものです。

## 2. 対象地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア等  
（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域に限る）

## 3. 賞の構成

大同生命地域研究賞は、次の3部門で構成されています。

- （1）大同生命地域研究賞  
長年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名を表彰  
（副賞300万円・記念品を贈呈）
- （2）大同生命地域研究奨励賞  
地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名を表彰  
（副賞100万円・記念品を贈呈）
- （3）大同生命地域研究特別賞  
対象地域を通じて、国際親善・国際貢献を深めるうえで功労のあった方1名を表彰  
（副賞100万円・記念品を贈呈）

#### 4. 選考方法

(1) 候補者の推薦

原則として、全国の大学・研究機関等の研究者に委嘱した推薦委員が候補者を推薦します。

(2) 受賞者の決定

本財団が委嘱する選考委員で構成する会議で受賞者を決定します。

< 2023年度選考委員（五十音順） >

早稲田大学人間科学学術院教授・東京大学名誉教授	井上 真 氏
日本女子大学文学部教授・同大学大学院文学研究科研究科長	臼杵 陽 氏
独立行政法人日本学術振興会監事	小長谷 有紀 氏
国立民族学博物館名誉教授	關 雄二 氏
総合地球環境学研究所特任教授・京都大学名誉教授	松田 素二 氏

以上

2023年度  
大同生命地域研究賞 受賞者

◆大同生命地域研究賞（1名）

○京都大学 名誉教授

たに ゆたか  
谷 泰 氏

「地中海・中近東地域における牧畜文化の歴史文化的意味に関する研究」  
に対して

◆大同生命地域研究奨励賞（3名）

○東京都立大学 人文社会学部 准教授

(五十音順)  
かわい ひろなお  
河合 洋尚 氏

「中国・客家の国際的ネットワークと「原郷」空間創出を事例とした、  
グローバル化時代の新しい地域研究の創成」に対して

○日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター 主任調査研究員

さかぐち あき  
坂口 安紀 氏

「ベネズエラを中心とするラテンアメリカの政治経済研究」に対して

○京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

ふるさわ たくろう  
古澤 拓郎 氏

「ソロモン諸島を基盤とする人類進化と適応に関する学際的地域研究の  
新展開」に対して

◆大同生命地域研究特別賞（1名）

○上智大学 アジア人材養成研究センター 研究員

ラオ キム リアン 氏

「アンコール・ワット『ISO14001』（環境マネジメントシステム）  
認証取得のための環境保全活動」に対して

2023年度  
大同生命地域研究賞

谷 泰 氏  
京都大学 名誉教授

## 略 歴

### 谷 泰（たに ゆたか）

1. 現 職：京都大学 名誉教授
2. 最終学歴：京都大学文学研究科史学科博士課程（2年度終了）中退
3. 主要職歴：1960年 京都大学人文科学研究所西洋部助手  
1968年 同志社大学工学部講師  
1969年 同志社大学工学部助教授  
1974年 京都大学人文科学研究所社会人類学部門助教授  
1982年 京都大学人文科学研究所社会人類学部門教授  
1989年 京都大学人文科学研究所所長（91年まで）  
1997年 京都大学人文科学研究所退官  
1997年 滋賀県立大学人間文化学部教授  
1999年 大谷大学文学部教授  
2004年 大谷大学退職  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① God, Man and Domesticated Animals—the birth of the Shepherds and Their Descendants in the Ancient Near East. Kyoto University Press and Transpacific Press. 2017
  - ② 「搾乳はいかにして開始されたか—西アジアにおける家畜化の意味と管理技法の展開から」、平田昌弘編『公開シンポジウムの記録 家畜化と乳利用 その地域的特質をふまえて—搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりに』、帯広畜産大学公開シンポジウム事務局刊、2016
  - ③ 『牧夫の誕生—羊・山羊の家畜化の開始とその展開』、岩波書店、2010
  - ④ Early techniques as a forerunner of milking practices. In The zooarchaeology of fats, oils, milk and dairying. J. Mulville & A. K. Outram(eds.), 114–120. Oxbow Books, Oxford. 2005
  - ⑤ 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界』、平凡社、1997
  - ⑥ 「乳利用のための搾乳はいかにして開始されたか—その経緯と背景」、『西南アジア史研究』43、西南アジア史研究会、1995
  - ⑦ Domestic animals as serf; Ideology of nature in the Mediterranean and the Middle East. In Rethinking Nature and Culture. R. Ellen & K. Fukui (eds.), Berg Pub. London. 1995
  - ⑧ 「家畜化の起源をめぐる」、福井勝義編『地球に生きる4—自然と人間の共生』、雄山閣、1995
  - ⑨ The geographical distribution and function of sheep flock leaders; a cultural aspect of the man-domesticated animals relationship in the southwestern Eurasia. In The Walking Larder. J. Clutton-Brock (ed.), 185–199. Unwin Hyman, London. 1989
  - ⑩ 『「聖書」世界の構成原理—性・ヴィクティム・受難伝承』、岩波書店、1984
  - ⑪ 『牧夫フランチェスコの一日—イタリア中部山村生活誌』、日本放送出版協会、

1976

- ⑫ 『「牧畜文化考」、京都大学人文科学研究所紀要『人文学報』52号、1976

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

## 業績紹介

「地中海・中近東地域における牧畜文化の歴史文化的意味に関する研究」  
に対して

谷泰氏は1952年に京都大学に入学、文学部で西洋史学を学ぶ学部生時代の1955年、山岳部員として京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検の準備を手伝い、今西錦司、中尾佐助、川喜田二郎、梅棹忠夫らに出会い、フィールドワークを重視する学風に接した。さらに大学院生時代の1958年には京都大学人文科学研究所の今西研究班に所属し、吉良竜夫、伊谷純一郎、藤岡喜愛、米山俊直、佐々木高明らに出会い、生態学、霊長類学、民族学、文化人類学など学際的な交流のもと、フィールドワークの学術的意義を確信するに至る。

1960年、京都大学人文科学研究所西洋部助手に採用され、在任中の1963年ミラノ大学に留学する機会をうる。その際じかに触れた教会のヴィクティム・イエスの図像表現やオス子羊を食する復活祭の儀礼的慣習に牧畜文化の反映を見出す。こうして「地中海・中近東地域の牧畜文化の歴史文化的意味」と総称しうるその後の同氏の研究テーマのひとつ「旧約聖書での神・人・家畜をめぐる言説の背景を古代オリエント世界での牧民の社会文化的位置から読み解く」という課題1を抱く。

1969年には、イタリア留学の経験をかかわれて、他の発展途上地域でなされるフィールド的地域研究と同じ視線でヨーロッパ社会を調査・記述するという趣旨で立ち上げられた京都大学ヨーロッパ学術調査隊（第二次）への参加を求められる。そしてイタリア中部山岳地移牧村を調査対象にし、隊の目的にそった調査を本格的に実現する。しかも同氏は、この調査地で、去勢牡を利用した群れ誘導技法に出会い、古代西アジア世界で早くから成立した宦官による人民統治技法がそれと同型であることに気付く。こうして「古代オリエント世界でみいだせる家産的支配下にある家畜と人とを同等のカテゴリーに属するとみなす認識枠の延長のもと、家畜管理領域でのこの技法が人民管理領域に拡張された可能性を示す」という課題2を抱く。

またおなじくこの調査地で、放牧羊群が自発的に人の居留地に帰還する行動、また搾乳という搾乳技法の発想にかかわるとみなせる実子を利用した孤児への乳母付けの技法の存在を知る。それが、最もはやく羊・山羊家畜化が開始された中近東地域を中心にした牧民集団のもとでの人・家畜間関係についての知見を集めることで、「搾乳開始に到るまでの家畜化の過程を再構成する」という課題3を抱かせることになる。

こうして1977年から四度にわたる文部省海外学術調査『ユーラシア南西部有畜社会の比較文化的研究』（班長；谷）、1989年から三度にわたる文部省海外学術調査『インド亜大陸における雑穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究』（班長；阪本寧男）、そして1993年稲盛財団学術奨励補助『地中海・中近東地域牧民の群れ管理技法の研究』によって、

地中海・中近東地域の諸牧民集団での調査を通じて、上記の課題2, 3に必要なデータを蒐集する。こうして課題2に関しては、別掲の主要関連著書・論文リスト番号①、⑤、⑦、⑨、課題3に関しては同リスト番号①、②、③、④、⑥で成果を公けにし、国内外でその説得力ある試みが評価され、現在でも議論の手がかりを提供している。

またこういう作業と並行して同氏は、家畜化開始以後成立した牧民集団が、やがて古代西アジアでの都市権力中心の所有する畜群を放牧受託をすることで残されることになった契約更新時の員数調べ文書の内容分析を行ない、古代オリエント世界での牧民と都市権力との緊張をはらむ関係性を明らかにする。こうして自らを都市周辺の荒地で小家畜を飼養する牧民集団とみなしたヘブライの民が、神の導きのもとで自己のアイデンティティを再確立する過程を描いた歴史書<旧約聖書での神・人・家畜をめぐる言説の背景を古代オリエント世界での牧民の社会文化的位置から読み解く>という課題1に応えた論考を、同著書・論文リスト番号①、⑤、⑩において公けにし、西欧文化の基礎を文化人類学的に相対化した数少ない試みとして評価された。

以上が谷氏の今回受賞対象となった業績の概要説明であるが、同氏がこれらの課題を見出すことになったイタリア中部山岳地移牧村での調査を通じて公にした書物に『牧夫フランチェスコの一日ーイタリア中部山村生活誌』（1976刊、のち平凡社ライブラリーにて復刊）がある。そこで同氏は、いわゆる従来の民族誌家が記述してきたような当該社会の文化規則の束でなく、当該社会の諸個人が、それらの文化規則を行為上の道具として選択的に駆使しつつ他者と相互行為し、自己固有の生を紡ぎだすと同時に、あらたな社会を再構成する姿の記述こそが記述されるべきであると考えた。こうして古くから継承された家畜管理技法をもって移牧業を維持する牧夫から、都市化の流れとともに牧夫を辞め出稼ぎにでるものなど、個々のライフヒストリーの担い手の集まりとして、村の今を描いている。このような文化人類学的記述の視点は、のちの文化人類学での対象記述の方法論を先取りしたものとして、地域研究をめざす多くの若手研究者にとっての参照の書となっている。

ただ同氏は、このような個人のライフヒストリーの束としての記述では、人々が相互行為しつつ新たな社会関係が構築される過程は記述されないという反省の下で、爾後『社会的相互行為の研究』（成果発表1987）や『コミュニケーションの自然誌』（成果発表1997）に見られる共同研究を開始している。そこですでに人類に共通して見いだされる言語的・非言語的コミュニケーションのあり方に関する基礎知見が得られており、文化に応じて異なるフィールド的現在としての出来事を分析・記述する方法上の手がかりを提供しており、地域研究者にとっても無視しえないパイオニア的作業となっている。

以上のように、谷泰氏の研究は、地域研究として看過されやすいヨーロッパを対象として本格的なフィールドワークを導入したという点で、地域研究のパイオニアであ

ると同時に、牧畜文化論やコミュニケーション論など、地域の文化的特徴から普遍的な人間研究へと展開を果たした点においてもパイオニアである。こうしたパイオニア精神によって開拓された学問的地平は広く、その功績は極めて顕著である。よって、選考委員会は一致して大同生命地域研究賞を授与することを決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2023年度  
大同生命地域研究奨励賞

河合 洋尚 氏

東京都立大学 人文社会学部 准教授

## 略 歴

### 河合 洋尚（かわい ひろなお）

1. 現 職：東京都立大学 人文社会学部 准教授
2. 最終学歴：東京都立大学社会科学研究所博士課程（2009年修了）
3. 主要職歴：2008年 中国嘉应大学客家研究院 専任講師  
2013年 国立民族学博物館研究戦略センター 助教  
2017年 国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授  
2021年 東京都立大学人文社会学部 准教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ①『＜客家空間＞の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』、単著、風響社、2020
  - ②『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状（客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在）』日中両語、共編、国立民族学博物館調査報告、2020
  - ③『客家——歴史・文化・イメージ』、共著、現代書館、2019
  - ④『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』、共編、風響社、2019
  - ⑤『Family, Ethnicity, and State in Chinese Culture Under the Impact of Globalization』, co-edit, Bridge 21 Publications, 2017
  - ⑥「越境集団としてのンガイ人——ベトナム漢族をめぐる一考察」、『アジア・アフリカ地域研究』17(2)、2018
  - ⑦『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』、共編、国立民族学博物館調査報告、2016
  - ⑧「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」、『文化人類学』81(1)、2016
  - ⑨『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』、編著、時潮社、2016
  - ⑩『全球化背景下客家文化景観的創造——環南中国海の個案』、共編著、暨南大学出版社、2015
  - ⑪「ベトナムの客家に関する覚書——移動・社会組織・文化創造」、『華僑華人研究』11、2014
  - ⑫「客家建築与文化遺産保護——景観人類学視野」、『学術研究』341、2013
  - ⑬「空間概念としての客家——『客家の故郷』建設活動をめぐって」、『国立民族学博物館研究報告』37(2)、2013
  - ⑭『日本客家研究的視角与方法——百年的軌跡』、編著、社会科学文献出版社、2013
  - ⑮『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』、単著、風響社、2013

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備考：2009年 社会人類学博士（東京都立大学）

## 業績紹介

「中国・客家の国際的ネットワークと「原郷」空間創出を事例とした、グローバル化時代の新しい地域研究の創成」に対して

河合洋尚氏は、文化人類学的な中国研究から出発し、景観を切り口とした独自の方法論を活用して、特定の空間の生産を通して民族、文化、アイデンティティが生成されていく過程を、広東省梅県における客家社会の精密なフィールドワークによって解明した優れた地域研究者である。その空間を生きる人々がグローバル化に対応して、状況を主導的に意味付け新たな世界を構築していくダイナミズムを解明することに成功した。河合氏はこうした一連の優れたフィールドワークとその分析、さらにはその成果の積極的な社会還元によって、グローバル化時代の新しい地域研究のモデルを確立しつつある。河合氏の独創的で画期的な研究と方法は、日本発のモデルとして、国際的な地域研究の発展に対して大きな刺激と貢献をもたらしている。河合氏が作り上げつつあるグローバル化時代の新しい地域研究のより具体的で独創的な成果は、以下の4点にまとめられる。

第一は、日本において、継続的かつ本格的に景観と景観論を社会、文化研究に取り入れることで、自然環境を含む多様な非人間的要素を対象にした視点への転換を図ろうとした点である。例えば日本における文化人類学の分野においては、景観を対象とする研究がまとまって登場するのは1990年代、景観人類学というサブ領域が明確に確立されるのは21世紀に入ってからのことだ。河合氏は、これまでの社会、文化の研究が、人間の存在と活動を無条件に前提としてきたことで、多くの要素を視野から除外してきた点を批判して、より深く人間と社会にアプローチするために、景観-空間論的方法に着目し独自の解釈と改変を加えて優れた方法に鍛え上がることに成功した。

独自の解釈と改変に貢献したのが、第二の成果である客家研究のグローバルでマルチサイトな展開である。河合氏は、2004年に広東省広州市の広府人を対象にした都市人類学的研究を開始し、2008年からは広東省東端の梅県とその周辺地域の客家地域における本格的なフィールド調査に着手した。そこで作り上げたのが第一の景観論的発想を基にした客家社会・文化へのアプローチであった。従来、梅県は客家世界の中心、「原郷」として認識されていた。しかし河合氏は、そのイメージが20世紀後半のグローバル化の進展の中で「客家空間」として構築されたものであり、その地域空間性によって、後から客家文化、客家アイデンティティ、客家的行動・思考様式が再創造されていったことを、親族、儀礼、風水、信仰、墓地、そして景観という個別テーマの綿密なデータによって実証した。さらに重要なのは、そうした構築主義的指摘にとどまらず、「客家空間」で生きる人々がそうした「発明された伝統」を受容するのは実は表面的であり、その深層は、人々自身が自らの「場所（自分たちの個別の世界）」を維持・生成

するために、この「発明」を複雑に生きているメカニズムを明らかにしたことである。

第三の成果は、この客家空間の研究を、梅県を媒介にして、世界各地に散在する客家コミュニティの実相とネットワークの研究に広げるマルチサイトな民族誌の実践に繋げることによって、グローバル化時代の地域研究の一つのモデルを提起している点である。河合氏は、2011年以降、東南アジア、オセアニア、ラテンアメリカ地域の12カ国において客家コミュニティの調査に着手している。広東省から客家が東南アジア、環太平洋地域に移住を開始した歴史的経緯を追跡し、当時の世界の政治経済構造の変化と重ね合わせる作業と、20世紀末のグローバル化の急進展と中国における改革開放の進展に合わせて移住した経緯の分析を総合することで、これまでほとんど未着手であったベトナム、タヒチ、ニューカレドニア、ペルーなどで重要な「客家空間」の構築過程を調査し、英語、中国語、日本語で成果を継続的に発信している。

河合氏の第四の成果は、調査対象者、調査対象コミュニティに対する成果還元における新しい試みである。従来の研究成果の社会還元は、講演や書籍、論文の公表などが主流であったが、河合氏は、より積極的なコミットメントと調査対象者・コミュニティとの協働を追求することで、学術研究と社会との繋がりの方に新しいモデルを提案している。その具体的な活動は、客家団体の外部メンバーとして資料の保存や会誌の作成に参画することから、日本の国立民族学博物館や台湾客家文化館における展示や講演、芸術祭などの企画運営を客家の人々と共に行う活動を組織することまで、幅広い活動におよび、その全ての段階において研究者自身が研究対象者とともに関与する方法を確立してきた。

河合氏は、客家研究を単なる中国研究、華僑研究の枠組から拡張し、東アジアのみならず、東南アジア、オセアニア、ラテンアメリカ地域の客家コミュニティを対象にし、そこに客家空間を創造することでグローバル化に伴う世界の急激な構造変化に対応していく複雑な仕組みを明らかにした。このようなグローバルな視野を地域研究に具体的に取り入れ見事に実践する手法は、21世紀の地域研究の新たな、そして豊かな可能性を体現しているといえよう。

以上のように挑戦的で卓越した研究業績を重ねてきた河合氏が優れた研究能力を有していることは明らかであり、将来的にも客家世界を対象とした地域研究の国際的牽引者となる研究者として期待できることから、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2023年度  
大同生命地域研究奨励賞

坂口 安紀 氏

日本貿易振興機構アジア経済研究所  
地域研究センター 主任調査研究員

## 略 歴

### 坂口 安紀（さかぐち あき）

1. 現 職：日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター  
主任調査研究員
2. 最終学歴：修士号（MA）1990年  
University of California, Los Angeles（UCLA）,  
Dept. of Latin American Studies
3. 主要職歴：1990年 日本貿易振興機構 アジア経済研究所 入所  
1995年～1997年 ベネズエラ中央大学開発研究所（GENDES） 博士課程  
2009年～2011年 ベネズエラ中央大学開発研究所（GENDES） 客員研究員  
2011年～2012年 アジア経済研究所地域研究センター  
ラテンアメリカ研究グループ グループ長代理  
2012年～2018年 アジア経済研究所地域研究センター グループ長  
2018年 アジア経済研究所地域研究センター 主任調査研究員  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ①「ベネズエラをめぐる大国の政策対応と思惑—米国・中国・ロシア」『ラテンアメリカ・レポート』38(2), 2022 :48-60.
  - ②「膠着化するベネズエラの政治経済危機：制度崩壊とインフォーマルな政治経済運営」『ラテンアメリカ・レポート』37(2), 2021 :1-19.
  - ③『ベネズエラ：溶解する民主主義、破綻する経済』中央公論新社 2021.
  - ④「ふたりの大統領の間で揺れるベネズエラ：これは「終わりの始まり」なのか？」『ラテンアメリカ・レポート』36(1), 2019 :44-58.
  - ⑤「ベネズエラのチャベス政権と後継マドゥロ政権：競争的権威主義体からヘゲモニー体制へ」『国際問題』(676) 2018: 26-34.
  - ⑥（編著）『チャベス政権下のベネズエラ』アジア経済研究所 2016.
  - ⑦「ベネズエラにおける参加民主主義：チャベス政権下におけるその制度化と変質」宇佐見耕一・菊池啓一・馬場香織編『ラテンアメリカの市民社会組織：継続と変容』アジア経済研究所 2016.
  - ⑧「ベネズエラ：女性の権利拡大の歴史とボリバル革命（マガリ・フギンスとの共著）」国本伊代編『ラテンアメリカ 21世紀の社会と女性』新評論 2015: 345-360.
  - ⑨（編著）『途上国石油産業の政治経済分析』岩波書店 2010.
  - ⑩（共編著）『図説ラテンアメリカ経済』日本評論社 2009.
  - ⑪「ベネズエラ：ボリバル革命を支える国営ベネズエラ石油（PDVSA）のジレンマ」『ラテンアメリカ・レポート』2008年 25(2): 55-66.
  - ⑫「ベネズエラのチャベス政権：誕生の背景と「ボリバル革命」の実態」遅野井茂雄・宇佐見耕一編『21世紀ラテンアメリカの左派政権：虚像と実像』アジア経済研究所 2008年: 35-67.
  - ⑬「ベネズエラの石油産業：超重質油依存とチャベス政権の政策」星野妙子編『ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論』アジア経済研究所 2007年: 215-252.

- ⑭「ベネズエラの企業経営：経営組織と経営者」星野妙子・末廣昭編『ファミリービジネスのトップマネジメント：アジアとラテンアメリカにおける企業経営』岩波書店 2006 年：205-242.
- ⑮「経済自由化の進展と政府・ビジネス関係の変化：ベネズエラ・コロンビアを中心に」小池洋一・堀坂浩太郎編『ラテンアメリカ新生産システム論：ポスト輸入代替工業化の挑戦』アジア経済研究所 1999 年：265-300.

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

## 業績紹介

「ベネズエラを中心とするラテンアメリカの政治経済研究」に対して

坂口安紀氏は、南米ベネズエラの政治経済を専門とする地域研究の専門家である。坂口安紀氏は、勤務先のアジア経済研究所において入所した 1990 年より、一貫してベネズエラの政治経済変動について実証的な研究を積み重ねてきた。坂口氏が現れるまで、日本にはベネズエラの政治経済を専門とする研究者が存在しなかった。いわば、坂口氏は日本における現代ベネズエラ研究の開拓者であり、過去 30 年にわたり、同国に関する我が国の議論の先頭に立ち牽引してきた実績を持つ。

坂口氏がベネズエラ研究を時間的な流れでまとめるとすれば、大きく二つの時期に分けられる。まず、研究者としてのキャリアを始めた 1990 年代の研究である。この時期のベネズエラでは、1950 年代末以降、長期にわたり安定的に継続してきた二大政党制に支えられた民主主義政治が大きく揺らぐ。「21 世紀の社会主義」を唱えることになる急進左派のウゴ・チャベスが 1999 年に大統領に就任すると、権威主義化の歩みが始まる。この頃、坂口氏は、ベネズエラが石油輸出国機構 (OPEC) の一員でもあることから、その石油産業の動向や実態について分析を行い、その知見を礎に他の産油国との比較研究を開始した。国家と企業、中央と地方、という二つの関係性を軸とした成果は、編著『途上国石油産業の政治経済分析』にまとめられている。そこでの比較の対象は、ラテンアメリカ域内のエクアドルの他、ロシア、中国、インドネシア、ナイジェリアを含むなど、ユーラシアならびにアフリカ地域まで視野に収めるグローバルな研究に仕立てあげている。

そうした地域間比較研究を受け、坂口氏が次なるテーマとして選んだのは、世界経済の動向に合わせて変動するベネズエラ経済、そしてチャベスの下で権威主義化が進む政治、さらにはその間の相互作用であった。二度にわたる長期の在外研究を含む継続的なフィールドワークによる成果を踏まえた実証的な分析としてまとめ、現地における状況の展開に合わせて、成果を継続的に公にしてきた点も地域研究の模範といえよう。

とくに、チャベス登場後のベネズエラは、今世紀に入ると、不安定な社会状況に陥る。チャベス政権の支持、不支持という国論を揺るがす極端な分断が生まれ、これが、政治や社会一般に限らず、学問の世界、さらには一般家庭の親族レベルまで重くのしかかり、深い亀裂をもたらした。対立が固定化し長引く中で、その影響はベネズエラという一国の枠組みを超えて、他国のベネズエラ関係者、ラテンアメリカ関係者の間にも影響してきた。

日本においても、ベネズエラに関する研究や報道においては、しばしばシニア世代の研究者を中心に、アメリカ合衆国の覇権に対する反発の立場から、チャベス政権に心情

的に肩入れする傾向が認められ、権威主義的な傾向を強めたチャベスとその後継者について厳しい評価を下す坂口氏が孤高に自らの主張を披露する場面も少なからずあった。そのような厳しい現実を身近に感じるようになって、対立する見解をふくむ様々なデータや情報を可能な限り収集し、またベネズエラ政府による統計が公表されていない事項については、公平性をつねに念頭に置くデータ収集に努め、説得性の高い議論を展開してきた。実証的な学術研究の成果に依拠したゆるぎない姿勢を決して崩すことがなかったことは賞賛に値する。

こうした坂口氏の研究は、現地における情勢の展開状況に呼応する形で発表された20編を超える雑誌論文ならびに2冊の編著『2012年ベネズエラ大統領選挙と地方選挙：今後の展望』、『チャベス政権下のベネズエラ』に結実している。

その集大成として出版した『ベネズエラ：溶解する民主主義、破綻する経済』は、チャベス政権とその後のベネズエラを主題に、政治、経済のみならず、社会開発、歴史・思想、石油産業、国際関係までも論じた包括的な現代ベネズエラ論である。一般読者をも意識した書きぶりながら、論拠を提示したうえで首尾一貫した議論と分析を行っており、学術水準が十分に担保されている。そのためベネズエラ研究の第一人者による本格的な研究分析としてばかりでなく、進歩主義的とみなされる研究者からも「様々なデータにもとづく説得的な分析」と評価され、現在では現代ベネズエラ研究のスタンダードワークとなっている。

本年5月末にブラジルで開催された南米諸国首脳会議でも、主要な議題の一つがベネズエラ問題であった。チャベスの後継者であるマドゥロによる社会への抑圧と人権侵害から多くの難民が生まれ、ラテンアメリカ各国は、ベネズエラ移民の扱いに苦慮している。ベネズエラ問題が、一国の問題にとどまることなく、ラテンアメリカという広大な地域における政治経済問題に発展しその行方に大きな影響を及ぼしている現在、坂口氏の研究が持つ意義はますます高まってきているといえよう。

以上のように、坂口氏が進めてきたベネズエラに関する実証的な研究レベルの高さ、そして広く一般社会への波及効果を考えたとき、その学問的功績は極めて顕著であり、今後の研究の発展が期待できる。よって、選考委員会は一致して大同生命地域研究奨励賞を授与することを決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2023年度  
大同生命地域研究奨励賞

古澤 拓郎 氏

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

## 略 歴

### 古澤 拓郎（ふるさわ たくろう）

1. 現 職：京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授
2. 最終学歴：東京大学大学院医学系研究科博士課程（2005年）
3. 主要職歴：2005年 東京大学サステナビリティ学連携研究機構 特任研究員  
2006年 東京大学国際連携本部 特任講師  
2010年 東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク 特任准教授  
2011年 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授  
2020年 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① Furusawa, T., Koera, T., Siburian, R., Wicaksono A., Matsudaira, K., Ishioka, Y. Time-series analysis of satellite imagery for detecting vegetation cover changes in Indonesia. *Scientific Reports* 13, 8437 (2023). <https://doi.org/10.1038/s41598-023-35330-1>
  - ② 『ウェルビーイングを植える島：ソロモン諸島の「生態系ボーナス」』京都大学学術出版会. 295頁. ISBN: 9784814003402. 2021
  - ③ Furusawa T, Pitakaka F, Gabriel S, Sai A, Tsukahara T, Ishida T. (2021) Health and well-being in small island communities: a cross-sectional study in the Solomon Islands. *BMJ Open*, 11(11): e055106. doi: 10.1136/bmjopen-2021-055106.
  - ④ 『ホモ・サピエンスの15万年：連続体の人類生態史』ミネルヴァ書房. 276頁. ISBN: 9784623084449. 2019
  - ⑤ Furusawa T and Siburian R. (2019) Do Traditional Calendars Forecast Vegetation Changes in Western Sumba, Indonesia? *Analyses of Indigenous Intercalation Methods and Satellite Time-Series Data. People and Culture in Oceania*, 35: 1-30.
  - ⑥ 「インドネシア・スンバ島西部の在来暦法：「苦い月」と「ゴカイ月」をめぐる地域間シグナル伝達の分析から」『アジア・アフリカ地域研究』17: 1-38. 2017
  - ⑦ Furusawa T, Naka I, Yamauchi T, Natsuhara K, Eddie R, Kimura R, Nakazawa M, Ishida T, Ohtsuka R, Ohashi J. (2017) Polymorphisms associated with a tropical climate and root crop diet induce susceptibility to metabolic and cardiovascular diseases in Solomon Islands. *PLoS ONE*, 12: e0172676.
  - ⑧ Takuro Furusawa (2016) *Living with Biodiversity in an Island Ecosystem: Cultural Adaptation in the Solomon Islands*. Springer. 190 + XXI pages.
  - ⑨ Furusawa, T., Myknee Qusa Sirikolo, Masatoshi Sasaoka and Ryutaro Ohtsuka (2014) Interaction between forest biodiversity and people's use of forest resources in Roviana, Solomon Islands: Implications for biocultural conservation under socioeconomic changes. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* 2014, 10:e10.

- ⑩ Furusawa, T. Naka, I., Yamauchi, T., Natsuhara, K., Eddie, R., Kimura, R., Nakazawa, M., Ishida, T., Inaoka, T., Matsumura, Y., Ataka, Y., Ohtsuka, R., and Ohashi, J (2013) Hypertension-susceptibility gene prevalence in the Pacific Islands and associations with hypertension in Melanesia. *Journal of Human Genetics* 58, 142-149
- ⑪ Furusawa, T. (2012) Tracking fishing activities of the Roviana population in the Solomon Islands using a portable global positioning system (GPS) unit and a heart rate monitor. *Field Methods* 24(2): 216-229.
- ⑫ Furusawa, T., Naka I., Yamauchi T., Natsuhara K., Kimura R., Nakazawa M., Ishida T., Nishida N., Eddie R., Ohtsuka R., Ohashi J. (2011) The serum leptin level and body mass index in Melanesian and Micronesian Solomon Islanders: Focus on genetic factors and urbanization. *American Journal of Human Biology* 23(4): 435-444
- ⑬ Furusawa, T. and Ohtsuka, R. (2009) The role of barrier islands in subsistence of the inhabitants of Roviana Lagoon, Solomon Islands. *Human Ecology*, 37(5):629-642.
- ⑭ Furusawa, T. (2009) Changing ethnobotanical knowledge of the Roviana people, Solomon Islands: Quantitative approaches of its correlation with modernization. *Human Ecology*, 37(2):147-159.
- ⑮ 「民俗知識に基づく人間・植物・動物の関係」大塚柳太郎（編）『ソロモン諸島：最後の熱帯林』東京大学出版会, pp. 55-81. 2004

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2005年 博士（保健学）（東京大学）  
 2017年 第16回日本オセアニア学会賞受賞（日本オセアニア学会）

## 業績紹介

「ソロモン諸島を基盤とする人類進化と適応に関する学際的地域研究の新展開」に対して

古澤拓郎氏は、人類生態学の視点による長期のフィールドワークに基づき、ソロモン諸島を起点としてオセアニア・東南アジアの地域研究を精力的に展開し、基礎と展開の両面における国際的な研究成果を数多く発信してきた。

古澤氏の研究の起点であり基礎となるソロモン諸島の研究では、食物摂取から動植物認識、物質文化、土地利用、森林生態に関わる量的・質的調査の双方を巧みに組み合わせ、既存学問の枠を大きく越えた研究成果を出してきた。具体的には、人々の生産から消費までの生態系連鎖を緻密なデータで解明し、その連鎖が島々によって異なる理由を地理的な条件から明らかにし、複数の原著論文を国際ジャーナルで公表した (Furusawa, T. and Ohtsuka, R., 2009. The role of barrier islands in subsistence of the inhabitants of Roviana Lagoon, Solomon Islands. *Human Ecology*, 37(5):629-642. など)。また、在地の動植物認識と利用を丹念に調べることで生物多様性を支える民俗知識の存在を解明し、その活用方法を提示した複数の原著論文もある (Furusawa, T. et al., 2014. Interaction between forest biodiversity and people's use of forest resources in Roviana, Solomon Islands: Implications for biocultural conservation under socioeconomic changes. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, 10:e10. など)。

いずれもミクロな調査結果から人類の適応論理の解明を試みるという点で地域研究の新展開を垣間見ることができる。

上記の基礎的な研究の中で垣間見た新展開を明確に示すのが、広くオセアニア・東南アジアにおける人間の健康や人類進化、生物多様性についての本格的な研究成果である。まずは、生物多様性の保全は人々の健康につながることを実証的に証明し、その成果を日英の単著として公表した (Furusawa, T., 2016. *Living with Biodiversity in an Island Ecosystem: Cultural Adaptation in the Solomon Islands*. Springer, 190pp. /古澤拓郎, 2021 『ウェルビーイングを植える島：ソロモン諸島の「生態系ボーナス」』京都大学学術出版会, 295 頁)。さらに、人類遺伝学や医学との共同研究により、同地域における疫学転換と人類進化との関連も解明した (Furusawa, T. et al., 2011. The serum leptin level and body mass index in Melanesian and Micronesian Solomon Islanders: Focus on genetic factors and urbanization. *American Journal of Human Biology*, 23(4):435-444. など)。

また、単著『ホモ・サピエンスの15万年：連続体の人類生態史』（ミネルヴァ書房、

2021年)は、人類を連続体(スペクトラム)として認識し歴史と特徴を読み解いたものであり、地域研究の成果を人類史という枠組みで捉え直すというスケールの大きな独創性をもつとともに、内容それ自体が人間の差別(人種、性別など)の虚しさを強く訴えるものとなっている。

このほか、古澤氏は、災害や気候変動に直面した人々による対応と対策案の検討に関する国際共同研究も実施しており、視野の深さと広さを活かす実践性をも有する研究者であるといえる。

以上のように、ソロモン諸島を対象とする精緻な調査に基づく実証研究を基盤として、現代的・実践的な課題にも答えうる学際的地域研究を展開してきた古澤氏には、今後も学際性と実践性を兼ね備えたモデルとなりうる地域研究の国際的牽引者となることが期待できることから、選考委員会は大同生命地域研究奨励賞の授与を決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2023年度  
大同生命地域研究特別賞

ラオ キム リアン 氏

上智大学アジア人材養成研究センター 研究員

## 略 歴

### ラオ キム リアン

1. 現 職：上智大学アジア人材養成研究センター 研究員
2. 最終学歴：東京工業大学大学院 総合理工学研究科 社会開発工学専攻  
博士課程修了（1984年）
3. 主要職歴：1984年～2014年 一般財団法人 日本品質保証機構 主任技術員  
・環境アセスメント業務および地球温暖化対策認証業務に従事  
1991年～2002年 上智大学アンコール遺跡国際調査団 メンバー  
・プノンペン王立芸術大学 非常勤講師  
・「文化と環境」集中講義、現地実習指導  
・カンボジア言語文化研究に従事  
1993年～2002年 日本・カンボジア法律家の会 メンバー  
・カンボジアの法律大学、法曹関係団体、関係者に法律支援  
1999年～2002年 カンボジア閣僚評議会「クメール文字ユニコード表示方式標準化委員会」アドバイザー  
・国際規格 ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 に提案  
2002年～2013年 上智大学 共同研究員  
・カンボジアにおける文化協力に従事  
2003年～2006年 アプサラ機構（アンコール 遺跡世界遺産を管轄するカンボジア政府機関）アドバイザー  
・アンコール遺跡地域に ISO14001 導入指導（2006年に認証取得、世界遺産として初めて）  
2014年～ 上智大学アジア人材養成研究センター  
研究員、現地駐在員  
・アンコール・ワット遺跡保存修復プロジェクトに従事  
・アンコール遺跡地域の環境保全活動に従事  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① 『អង្គរនិងភ្នំ - ជីវិតរបស់ជនជាតិជប៉ុនម្នាក់ជាមួយអង្គរ-』 [カンボジア語訳書：石澤良昭著『アンコール・ワットと私』（連合出版）、2022]
  - ② 「アンコール遺跡地域での子ども環境教育活動」〔第17回アンコール遺跡国際調査団報告、上智大学アジア人材養成研究センター、2012〕
  - ③ 「世界遺産への挑戦 - アンコール地域環境保全への取り組み」〔『グローバル/ローカル文化遺産』、上智大学出版 2010〕
  - ④ 『ស្តង់ដារអន្តរជាតិ ISO14001:2004 ប្រព័ន្ធគ្រប់គ្រងបរិស្ថាន』 [カンボジア語訳書：“International Standard ISO14001:2004 Environmental Management systems”、日本品質保証機構 2005]

- ⑤ 「アンコール都城を取り囲む自然環境」〔『季刊・文化遺産』18、2004〕
- ⑥ 「アンコール旧都城を取り囲む文化環境 —文化・自然・人間—」〔第7回アンコール遺跡国際調査団報告、上智大学アジア文化研究所 2002〕
- ⑦ 「自然環境から見たアンコール遺跡」〔『アンコール遺跡の建築学』、連合出版 2001〕
- ⑧ 「アンコール旧都城を取り囲む文化環境」〔『アンコール遺跡と社会文化発展』、連合出版 2001〕
- ⑨ 『開発途上国環境保全計画策定支援調査報告 —カンボディア王国—』、環境省委託 2001〕
- ⑩ 『ច្បាប់រដ្ឋប្បវេណី (ករណីប្រទេសជប៉ុន)』 〔カンボジア語訳書：池田真朗著『民法への招待』、日本・カンボジア法律家の会 2000〕
- ⑪ 『ច្បាប់ព្រហ្មទណ្ឌ (ករណីប្រទេសជប៉ុន)』 〔カンボジア語訳書：中山研一著『刑法入門』、日本・カンボジア法律家の会 1999〕
- ⑫ 「カンボジアの遊戯」〔『民族遊戯大事典』、大修館書店 1998〕
- ⑬ 「トンレサップ湖とカンボジアの人々 —大いなる湖の恩恵：人間・自然・文化—」〔『カンボジアの文化復興』14、上智大学アジア文化研究所 1997〕
- ⑭ 「危機にある生物多様性 —カンボジアから、『世界』629、岩波書店 1996〕
- ⑮ 「カンボジア人にとっての文化遺産、国際協力と日本への期待」〔『まちなみ』20、大阪建築士事務所協会 1996〕
- ⑯ 「カンボジアのことわざ」〔『世界の故事・ことわざ』、自由国民社 1996〕
- ⑰ 「アンコール地域の水環境と今後の課題」〔『カンボジアの文化復興』11、上智大学アジア文化研究所 1995〕
- ⑱ 「アンコール遺跡と環境保全」〔『文化遺産の保存と環境』、講座「文明と環境」12、朝倉書店 1995〕
- ⑲ 『カンボジア語実用会話集』〔連合出版 1993、第4版増補 2001〕
- ⑳ 「アンコール地域の陸水環境について —水質の予備調査—」〔『カンボジアの文化復興』6、上智大学アジア文化研究所 1992〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：1984年 社会開発工学博士（東京工業大学）

## 業績紹介

「アンコール・ワット『ISO14001』（環境マネジメントシステム）認証取得のための環境保全活動」に対して

カンボジアは1993年に和平を達成した。しかし、2000年代には年間約300万人の観光客が押し寄せ、ゴミ、排気ガス、水質汚染など、深刻な環境問題に直面した。

ラオ氏はこの惨状を解決するため、カンボジア政府に対して、環境保全のため「ISO14001（環境マネジメントシステム）」の認証取得を進言し、その『マニュアル教本』をカンボジア語に全訳した。そのうえで、その『マニュアル教本』を売店、集落、そして学校などに配布し、ゴミ・ゼロ活動を3年にわたり実施した。

その結果、2006年、厳しい審査を経てユネスコ世界遺産の中でアンコール遺跡が初めて「ISO14001認証」を取得した。

ラオ氏はアンコール遺跡から湖岸沿いに南へ約100キロのストウン市に生まれた。地元のある学校を経て首都プノンペンのリセ・シソワットに入学し、卒業後は最難関の日本国政府奨学金留学生として東京工業大学に留学した。同大学で工学博士号を取得した後、通産省（当時）所管の財団法人「日本品質保証機構（JQA）」に入社した。

当時、カンボジアにおいてはポル・ポト政権が誕生したため、帰国を断念し、日本国籍を取得した。しかし、ラオ氏は親戚や家族が残るカンボジアの難民救済に尽力した。

ラオ氏は1991年、上智大学アンコール遺跡国際調査団の通訳としてカンボジアに一時帰国したときに、住民の飲み水の水質調査、水環境、トンレサップ湖などの調査をおこなった。その調査結果の報告は、1992年3月に「アンコール地域の陸水環境について—水質の予備調査」『カンボジアの文化復興』Vol. 6、pp. 109-128、（上智大学アジア文化研究所）、1993年11月に「アンコールの環境問題—水環境を中心に—」『第2回アンコール遺跡国際調査団報告』（上智大学アンコール遺跡国際調査団）、1994年11月には「プノンペン市内におけるトンレサップ川の堆積物」『カンボジアの文化復興』Vol. 10、pp. 82-93、（上智大学アジア文化研究所）、1995年1月「アンコール地域の文化遺産と自然環境」『アンコール遺跡調査報告会』（上智大学アジア文化研究所）、1995年5月「アンコール地域の水環境と今後の課題」『カンボジアの文化復興』Vol. 11 pp. 85-98、（上智大学アジア文化研究所）、1996年1月「アンコール地域の水環境—継続調査—」『カンボジアの文化復興』Vol. 12 pp. 91-98、（上智大学アジア文化研究所）、1997年7月には「トンレサップ湖とカンボジアの人々—大いなる湖の恩恵：人間・自然・文化—」『カンボジアの文化復興』Vol. 14、pp. 83-107、（上智大学アジア文化研究所）、あるいは2010年には“International Standard ISO14001:2004 Environmental Management systems -Requirements with guidance for use”（クメール語訳書）、（79p）、（財）日本品質保

証機構、を刊行するなど、一連の研究業績にまとめられている。

また、2001年3月には「アンコール遺跡地域での子ども環境教育活動」『第17回アンコール遺跡国際調査団報告』（上智大学アジア人材養成研究センター）、2002年2月には「アンコール遺跡と環境保全」『文化遺産の保存と環境』、講座「文明と環境」第12巻、朝倉書店、pp.121-138、そして「アンコール都城を取り囲む自然環境」『季刊・文化遺産』Vol.18、pp.68-73（並河万里写真財団）、2012年3月など遺跡と自然環境といったテーマでも論考を発表し、2004年10月には「アンコール旧都城を取り囲む文化環境—文化・自然・人間—」『第7回アンコール遺跡国際調査団報告』（上智大学アジア文化研究所）、2001年4月には『開発途上国環境保全計画策定支援調査報告—カンボディア王国—』、環境省委託、といった報告書とともに、さらに、「アンコール旧都城を取り囲む文化環境」、『アンコール遺跡と社会文化発展』、pp.99-118、連合出版、2001年7月、「自然環境から見たアンコール遺跡」、『アンコール遺跡の建築学』、pp.93-112 連合出版、2005年3月、「世界遺産への挑戦-アンコール地域環境保全への取り組み」、『グローバル/ローカル 文化遺産』、pp.118-132、上智大学出版、共著などといった、アンコール遺跡をめぐる環境保全に係わる諸問題についても論考を発表している。

なお、ラオ氏は「日本品質保証機構（JQA）」を定年退職後、小・中学校での環境教育を普及させるため、住居を祖国へ移して現在に至るまで奉仕活動を継続している。

以上のように、ラオ氏は、ユネスコ世界遺産の中で、初めてアンコール遺跡が「ISO14001 認証」を取得することに貢献し、また、カンボジアにおいて、小・中学校での環境教育を普及させるため、現在に至るまで奉仕活動を継続している。よって、選考委員会は一致して大同生命地域研究特別賞を授与することを決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

以上